

宮城県沖地震40年

5人の証言

「6・12」と「3・11」を経験して

隣近所と声掛け合って

元仙台市青葉消防署長
堀江 久一さん(67)
＝仙台市泉区松陵



当時は北消防署のレスキュー隊員でした。非番だったあの日、若林区荒井の実家で被災しました。家は斜めに傾き、倉庫や納屋から米ぬかがあふれ出しました。翌日から本格的な救援活動に入りました。1995年の阪神大震災で陸上派遣隊長を

務め、行方不明者の捜索を支援。町内会の結び付きが希薄で、誰がどこにいるか分からず難航しました。2004年にあった新潟県中越地震の被災地にも赴きました。東日本大震災の激しい揺れでは、勤務していた青葉消防署のある市中心部で大きな建物被害はありませんでしたが、津波で沿岸部は跡形もなくなりました。消防学校の同期や親族、友人ら10人を亡くしました。

この国に災害が来ない時などありません。空振りの避難でもいい。命を守るための心構えをいつも持ち、隣近所と日頃から声を掛け合ってほしいです。

女性リーダー育成励む

北仙台地区防災協議会女性リーダー代表
杉山 せきさん(77)
＝仙台市青葉区水の森3丁目



三条中(仙台市青葉区)の教諭として中総体の引率をしていた際、揺れに襲われました。周囲が停電し、商店街にガラスが散乱するなど、恐ろしく震えたのを覚えています。生徒に帰宅を促し、翌日から手分けして安否を確認しました。直前の3月まで在籍していた中学校の

生徒がブロック塀の下敷きになり、亡くなりました。自分の身を自分で守る防災教育の必要性を強く実感しました。

東日本大震災では水の森地区の民生委員として炊き出しをしました。地域には月1回のサロンを通じ、住民同士の顔が見える関係がありました。野菜などの物資を分け合う姿など、普段からの交流が有事に役立つことを証明しました。

現在は北仙台地区防災協議会で、乳幼児を抱えた母親や高齢者に心配りができる女性防災リーダーの育成に励んでいます。体験を伝えていくつもりです。

医療態勢 今後も進化を

医療法人千田クリニック理事長
千田 典男さん(92)
＝仙台市青葉区荒巻神明町



地震発生時は、仙台市青葉区に開業した内科診療所にいました。木造の建物が倒れるかのような激しい揺れでした。当時は有床で、患者5～6人が2階に入院中。幸い無事でしたが、電気やガスなどが停止する中、残る食材で職員らが何とか食事を出しました。

救急医療の態勢が不完全な時代でした。市内の外科医院にはけが人が殺到。車のヘッドライトを照らし、遅くまで診療に当たった医師もいたようです。市医師会役員を長年務めました。40年前の地震は災害救急医療の整備に向けた議論が進む契機になったと感じます。

東日本大震災でも医院は無事で早期に再開しました。余震で看護師らが数日間寝泊まりしました。震災の甚大な津波被害を踏まえ、災害医療の見直しが進みました。一つ一つの災害を教訓に、医療態勢を進化させ続けなければならないと改めて思います。

子どもの視点で考える

防災士会みやぎ理事
若生 彩さん(51)
＝仙台市若林区荒町



40年前の地震発生時は小学6年でした。仙台市宮城野区原町の学校から、日の出町にバスで帰宅中に車体が大きくバウンドしました。信号の停電で大渋滞となり、バスを降りました。倒壊したビルやタンクからあふれた化学薬品でアスファルトが溶けた道路などを目にしながら

ら、独りぼっちで黙々と歩きました。東日本大震災は、中学3年だった長女の卒業式前日でした。小学3年の次女を迎えに行った学校では正門付近で大人たちが混乱。静まりかえった教室の机の下にうずくまり、声を殺して泣いている娘たちの姿が、昔の自分に重なりました。

災害が起きた時、大人は自分のことで手いっぱいになりがちです。かつて子どもだった私たちが当時、何を感じ、どんな助けや備えが必要だったのか。年齢を超えて声を掛け合いながら、子どもの視点で考え続けることが重要です。

必需品 リュックに常備

主婦
吉谷恵美子さん(57)
＝仙台市太白区山田北前町



地震発生時は高校生。下校し、仙台市太白区緑ヶ丘1丁目の自宅で一息ついてる時、ドスンドスンという揺れに襲われました。物が散乱し、外を見ると近所の石段に10センチ近い亀裂が一直線に入っていました。自宅の二次災害の恐れなどから防災集

団移転の対象となり、1980年ごろに両親と兄、飼っていた犬と山田北前町に移りました。避難生活が続いた中、犬が不安な表情を見せたり、何度も遠ほえしたりした姿が忘れられません。

結婚後は市内の別の地域で生活し、父が亡くなったのをきっかけに15年ほど前、夫婦で実家に戻り、母と同居しています。東日本大震災では幸い、大きな被害はありませんでしたが、備えの必要性を痛感しました。高齢の母と暮らす今、水や生活用品などを備蓄し、必需品をリュックに入れて常に持ち歩けるようにしています。

あの日の記憶忘れず



宮城県沖地震は1978年6月12日午後5時14分ごろ、金華山沖60キロの深さ40キロを震源に発生した。マグニチュード(M)7.4と推定され、死者は28人(宮城県27人、福島県1人)。このうち18人が約68万戸(宮城県内42万戸)が停電。宮城の8万7400の26897億6414万円に戸で断水し、3分の2を占めた。約1028人で、うち仙台市が9300人を占めた。内が約1カ月を要した。7573棟の建物が全半壊し、復旧まで約1カ月を要した。宮城の被害総額は当時の県の一般会計予算に匹敵する規模に上った。

被害総額 県予算に匹敵

被災し、倒壊した仙台ガス局の施設。市内に張り巡らされたガス管も各所で切断され、供給の完全復旧には約1カ月を要した。1978年6月、仙台市宮城野区幸町78年6月、仙台市宮城野区の出町

意識高める催し多く



宮城県沖地震と東日本大震災による2度の経験を、いかに次への備えにつなげるか。市民講座や防災模試を通じ、意識を高める取り組みが広がっている。仙台市で2015年に行った国際的な防災行動世界会議で採択された国際的な防災行動

市民講座や防災模試

指針「仙台防災枠組」。実践のあり方などを学ぶ講座が5月18日、青葉区であり、受講した町内会役員や企業担当者ら約80人が地域防災との関わりを考えた。



地域の再生・活性化を応援 〈JTグループの被災地支援〉

Report 地域の未来を支える「企業の子カラ」



JTサンダースの選手が技術指導などを行うバレーボール教室。2017年6月、会場：東松島市市民体育館



東原市で行われた将棋フェスティバルでの棋士トークショー。2017年8月開催

地域のにぎわいの場づくりとして「JT応援プロジェクト」にも取り組んでいる。被災3県の新聞社が主催する将棋フェスティバル、バレーボール教室に協賛し、第一線で活躍する棋士・選手と地元の人々が触れ合うイベントを通じ、地域復興への貢献を目指す。

2018年度は、バレーボールレミアリーグ男子で活躍する「JTサンダース」の選手らによる小中学生らを対象にしたバレーボール教室を、6月24日に石巻市総合体育館で開催する。

東日本大震災の復興支援にも力を注いでおり、「ひと」と「未来へ」をテーマに、コミュニティづくりへの「つながり支援」、農業分野における「なりわい支援」、地域活性化への「にぎわい支援」の3つの領域で活動を行う。

JT東日本大震災復興支援 「ひと」と、未来へ。 3つの領域で応援 「ひと」と「ひと」つながり支援 「ひと」と「農」なりわい支援 「ひと」と「まち」にぎわい支援

今年2月に発生した台湾東部地震をはじめ、熊本地震、台風21号など、国内外の被災地への支援を行っているJTグループ。東日本大震災の復興支援では、「ひと」と「未来へ」をテーマに、将棋・バレーボールのイベント開催を通じて、被災地の人と人とのつながりを支えている。